

聖マリア国際協力ニュース

第96号

平成20年8月1日発行

JMTDR (国際緊急援助隊医療チーム) 導入研修に参加して

ICU/CCU 堤 礼



模擬診療を前に打ち合わせ

幼い頃、父から見せられた一枚の写真。何の屈託もない笑顔、澄んだ瞳で写る少年・少女たちの写真でした。話を聞けば、彼らは何日もご飯が食べられず、病院にも行けず、中には病気で親が亡くなった子もいる。「私たちはとても

そして何より大切なことはチームワーク。実際にテントの中の模擬演習や宿泊所の設置など、たくさん討議する場がありました。想像をはるかに超えた状況の中で目標を達成するためには、お互いに支えあうことはもちろん、なんでも共有すること、信頼関係の大切さ、問題解決の方法など、今まで以上に考える機会となりました。全国各地から集まった様々な職種の人たちと交流できたことも良い機会だったと感じています。実際にミッションに参加された方々の話を聞く機会もありました。まだ記憶に新しいミャンマーのサイクロン被害や四川大地震のミッションに参加された方の話を聞いて、自分の価値観・視野・視点が変わったと思います。そのくらい彼らの言葉には重みがあって、姿はまぶしく、自分もそうなりたいたい強く思いました。

「私たちはとても贅沢に過ごしていることを忘れてはいけないよ。」と言われた事を今でも鮮明に覚えています。

それが数年が経ち、テレビでも難民の人々や災害で貧しくなった人々等を多く見かけ、いつの日か彼らのような人々と接する機会はないだろうかと考えていた時、青年海外協力隊やJICAの存在を知り、看護師となり、聖マリア病院に入職しました。そしてJMTDRに登録している職場の先輩から、仮登録・導入研修の話聞き、今回研修に参加することができました。

研修ではシミュレーション形式で講義があり、海外で働く厳しさ、臨機応変に適應することの大切さを強く学びました。例えば、いつも当たり前に使っている物品の数々や機械はもちろんありません。携帯できる数が限られているため、その中で効率のよいやり方や物の使い方、代用品はないかなど、瞬時に判断しなければなりません。いかなる状況でも穏やかでいられるよう、自己をコントロールできる力も必要だと思いました。

更に、特殊感染症や人的被害という危険と隣り合わせの状況で業務を行うため、自己防衛能力も問われます。

最後に講師の方が言われた中で一番に残っている言葉があります。

「一番身近にいる家族を愛せない人には良い医療・看護なんてできやしない。まして、海外援助などできるわけがない。そんな人が人間愛を語るなんて、世の中どうかしてるよ。今以上に家族を愛しなさい。そこから始まるよ。」

彼らのように器が大きい、大きな愛を持った人になりたいとも思いました。たった3日間しかありませんでしたが、学んだことは言葉では言い尽くせないほどたくさんありました。これを機会にこれからも様々なことを頑張ろうと思います。



模擬診療の模様

新生児センターでの看護師研修を終えて

さる7月1日から4日まで、韓国忠南大学校病院の看護師、崔永周さんと盧光善さんが当院新生児センターにて看護研修を受けられました。(一緒に来日した小児科医、尹卿彬さんは7月11日まで滞在。)研修を終えるにあたり、アンケートに当院や日本についての印象を書き綴っておられますので、ご本人の了解を得て以下に掲載します。

- * 研修部署の新生児センターと自分の病院の施設とを比べて、共通している点は何ですか?
「大部分の医療機器、および医療システム。」(崔)
「シリジポンプ、モニター、インキュベーターの種類が似ていて、馴染みやすかった。」(盧)
「手の消毒を頻繁に行うところ。」(盧)
- * それでは違っている点はどこですか?
「聖マリア病院の方が規模が大きく、マンパワーも充実している。」(崔、盧)
「湿度が高いせいか、インキュベーターに加湿器を付けないところ。」(盧)
「ミルクを飲ませてくれる保育士がいるところ。」(崔)

韓国忠南大学校病院 崔永周・盧光善



今回来院した3名の研修員。向かって左が盧光善さんで右が崔さん。

- * その他他の感想、病院職員へのメッセージ等がありますか?
「お世話になった職員の方々の配慮や親切に感謝します。日本語の勉強をしなければと思いました。韓国に帰ったら習おうと思います。」(盧)
「たくさんのことを学び、見ることができてよかった。すべての人たちが親切に接していただき、日本に対して良い印象を持つようになりました。」(崔)

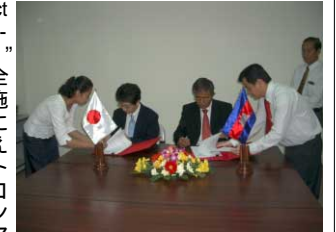
* 研修を通して、今後の仕事に活かせるような点は見つかりましたか?
「光線療法を保育器内ではなく、ベッド上で行うこと。(崔 盧)
「SpO2モニターを赤ちゃんのベッド上に置かず、横に掛けておくこと。」(崔)

カンボジア王国医療技術者育成プロジェクト終了時評価調査

国際協力部 高岡宣子

標記調査に看護および学校運営分野担当の調査団員として、6月1日から13日まで派遣されました。本プロジェクトは、医療技術者の基礎(養成)教育システムを強化するための5年間の技術協力プロジェクトで、当院も国内委員、短・長期専門家派遣、調査団員派遣などの協力を進めてきました。本プロジェクトは4つの職種(正看護師、臨床検査技師、放射線技師、理学療法士)を対象に、国家規定の策定など行政レベルから、教材開発や教員の能力向上など教育現場(5つの教育施設)レベルまでの包括的な支援に取り組んでいます。また、プロジェクトが取り組む範囲の明確化と、成果と投入のバランス改善などのために、プロジェクトの枠組み(Project Design Matrix)と活動計画(Plan of Operation)の見直しを2度行っています。難度の非常に高いプロジェクトですが、専門家とカウンターパートなどの並々ならぬ努力により、終了時評価調査で

は、「Overall, project has been successfully implemented」(プロジェクトは全般的に成功裏に実施された)との結論に達しました。加えて、本プロジェクトの実施により、プロジェクト・デザインなど同様の課題にアプローチする際の、重要な多くの教訓が示されました。最後に、調査に当たりお世話になった関係者の方々にお礼を申し上げます。



調査報告書等への署名



スーダンでのNGO技術者支援事業(2)

救急診療科 矢野和美



ヘルスセンターでの集合写真

始について報告いたしました。今回はその後のご報告をいたします。

生活調査の結果、トイレを使用している家庭がほとんどなく、多くの方があちこちで排泄を行っていることが判りました。このため雨季になると排泄物が簡単に流れ込んだり、八工が繁殖し、それらの結果、下痢の患者数が増えます。そこで今回、村の小学校にトイレを建設するために日本大使館の草の根無償という制度に応募することにしました。これには二つの目的があります。現在、村では救急車を使っての衛生教育放送および村の女性をターゲットにした健康教育を行っています。その中には排泄や手洗いについての教育指導を行っています。実際に家にトイレがないため、村人に直接、指導するのはなかなか現実的ではありません。そこで学校のトイレを通じて将来を担う子供たちに衛生教育を実践しようというのが目的です。もう一つの目的は、この援助制度に日本のNGOロシナテスが裏方に回ってサポートし、村人が中心となって制度に応募するための活動をしてもらうことです。村人が活動に直接参加することで衛生問題に関心を高めること、村に委員会を設けて活動する経験を通じ、村の開発を村人自身でやっていく力を育

てることです。NGOロシナテスが運営を開始したヘルスセンターは、現在、現地スタッフによる医療が中心で行われるまでに成長しました。

今後の課題は、村人たちが運営を行っていくための能力を育てていくことです。今回の活動はそのための第一歩です。毎週、村の代表者と話し合いが続き、2ヶ月が過ぎようとしています。前回、スーダンでのデモグラフィック生活調査の結果と母子保健プログラム開

スーダンでの仕事は、聖マリア病院の救急部での診療とはかけ離れた世界ですが、途上国では医療を行うだけでは健康状態は改善されません。包括的な支援協力が必要です。助産婦による妊婦健診も開始されましたが、村人の古い間違った習慣や知識を変えていくにはまだまだ時間がかかります。ヘルスセンターでの分娩についても日本の助産師さんや産科医の専門的な意見が必要な時期になってきました。

地道な活動ですが、しばらくは日本からこの活動を応援したいと思います。現地で活動しなくても日本からいんな支援ができます。皆さんの中で国際保健や母子保健に興味がある方は一緒に考えてみませんか。

今月の動き



- 【受入】
 - ・8月21日(木)～8月30日(土)
韓国カトリック医療協会 看護グループ研修を実施
- 【派遣】
 - ・8月19日(火)～9月5日(金)
磯東一郎(東京連絡事務所); ポリビア・地域保健システム向上プロジェクトへ短期派遣専門家として
- 【その他】
 - ・8月3日(日)～6日(水)
高松純(麻酔科)、高岡宣子(国際協力部)がタムリン病院グループとのMOU締結のため、インドネシアへ